

北海道のユキノシタ属植物

顧問 野坂志朗

(1)

Saxifragaceae — ユキノシタ科(狭義)
 — は、多年草、稀に一・二年草の、世界で
 30属、600種近くを含む科で、外国産のもの
 では、*Saxifraga decipiens* (サキシフ
 ラガ・デシピエンス。西洋クモマグサ) など
 がよく栽培されている。我国には、チダケサ
 シ属 (*Astilbe*)、イウユキノシタ属 (*Tan
 akaea*)、ヤグルマソウ属 (*Rodgersia*)、ユキ
 ノシタ属 (*Saxifraga*)、ヤワタソウ属 (*P
 eltoboykinia*)、アラシグサ属 (*Boykin
 ia*)、ネコノメソウ属 (*Chrysosplenium*)
 ズダヤクシュ属 (*Tiarella*) 及びチャルメ
 ルソウ属 (*Mitella*) の9属約55種を産す
 る。

この科を代表するユキノシタ属 (*Saxif
 raga* — “岩を割る、の意) は、我国に約16
 種を産し、そのうち、ダイモンジソウ、キョ
 シソウ、エゾノクモマグサ、シコタンソウ、
 ユウバリクモマグサ、チシマクモマグサ、ク
 ロクモソウ、チシマイワヅキ、フキユキノシ
 タ、ヤマハナソウ及びクモマユキノシタの11
 種が北海道に自生する。東京大学名誉教授原
 寛博士 (1939年) によると、この属は4亜
 属に区分されるが、区分の大要は次の様であ
 る。

- 1 { 花は左右相称。葉は長柄あり。
 …………… A. ユキノシタ亜属
 花は放射相称。…………… 2

- 2 { 萼筒は発達し、果時膨大して鐘形と
 なる。葉は腎形。往々珠芽あり。
 …………… B. ムカゴユキノシタ亜属
 萼筒は発達悪く、果時に膨大せず浅
 盃形。…………… 3
 3 { 地上茎は発達分枝し、葉を密に互生。
 …………… C. シコタンソウ亜属
 地上茎発達悪く、根出葉は通常叢生。
 …………… D. チシマイワヅキ亜属

A. ユキノシタ亜属 (subgen. *Sekika*)

この亜属は、Reichenbach 氏やEngler 氏の *Diptera* 節に相当し、我国と中
 国を中心に極東の特産である。我国には、ダ
 イモンジソウ、センダイソウ、ジンジソウ、
 ハルユキノシタ及びユキノシタの5種を産す
 るが、北海道に自生することの明らかなもの
 は、ダイモンジソウのみである。

(1) ダイモンジソウ

英人園芸家 Robert Fortune 氏 (1861年
 来日) が東洋から持ち帰って栽培した生品に
 より、Hooker 氏が1863年に記載発表した *S
 axifraga fortunei* に相当し、Franch
 et 氏 (1885年) によれば、チベット及び八
 丈島がその自生地というが、Fortune 氏が
 東洋のどこで採取したものかは不明である。
 中国・朝鮮半島及び我国に産する。

我国に広く分布し、低地より高山帯にわたり湿気ある岩上に見られ、観賞用山草としてもよく栽培されている。葉の大小、形、色、厚さ、毛の状態、鋸歯の形、花卉の形や大きさ等について極めて変化多く、多数の変種や品種が記載されているが、各変種・品種間の中間形がいろいろあって、判然と分類することは不可能である。最も普通に見られる形は *S. fortunei* Hooker fil. var. *incisolobata* Nakai として扱われ、単に「ダイヤモンドソウ」といえば、この学名を用いるのが適当である。

S. fortunei の変種として我国で記載されたもののうち、比較的区別しやすい主なものは、およそ、次の様である。

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | } | 葉の巾は長さより短く、基部は楔形時には截形、稀に浅心形。……………2 |
| | | 葉の巾は長さより広く、腎円形で基部は心形、稀に截形。……………3 |
| 2 | } | 葉は長さ4~14mm、巾5~16mm、裂片は全縁又は両側に1歯。全体小型で屋久島上部の特産。…………… |
| | | …………… a. ヤクシマダイヤモンドソウ
葉は長さ2~5cm、巾1.5~4.5cm、裂片は卵形で不整鋸歯あり。(図A、B)…………… b. ウチワダイヤモンドソウ |
| 3 | } | 花梗に長腺毛あり、花茎・葉身・葉柄に毛多く、葉厚し。花期10~11月。…………… |
| | | …………… c. イズノシマダイヤモンドソウ
花梗に小腺毛あり。……………4 |
| 4 | } | 葉は5~7中~深裂(図C、D)。…………… |
| | | …………… d. ナメラダイヤモンドソウ
葉は7~12浅裂。…………… e. ダイヤモンドソウ |

a. ヤクシマダイヤモンドソウ (*S. fortunei* var. *minima* Nakai)

葉は上面有毛、下面無毛。縁毛あり。花茎は7cm前後で、ダイヤモンドソウ類中で最も小型。屋久島上部特産。

b. ウチワダイヤモンドソウ (*S. fortunei* var. *obtusocuneata* Nakai)

本州・四国・九州に産する。

c. イズノシマダイヤモンドソウ (*S. fortunei* var. *crassifolia* Nakai)

Hooker 氏の *S. fortunei* に最も近いといわれる。茎・葉柄に毛が多く、千葉県、伊豆七島、八丈島に産する。八丈島産のものは、本田正次博士によって *S. jotanii* として記載されたこともある。

d. ナメラダイヤモンドソウ (*S. fortunei* var. *suwoensis* Nakai)

北陸、山陰、岐阜県等に産する。

若林三千男・里見信生両氏により、福井県坂井郡丈鏡山からエチゼンダイヤモンドソウ (*Saxifraga acerifolia* wakabayashi et Satomi) が植物分類・地理第25巻167頁(1973年)に新種として記載発表されたが、その後、東京都立大牧野標本館から、秘山・小林両氏によって、牧野富太郎博士が1902年、植物学雑誌第16巻202-203頁に、ダイヤモンドソウの変種として *S. cortusaefolia* var. *partita* Makino (カエデダイヤモンドソウ) を記載発表したものの基準標本(1893年、福井県坂井郡丈鏡山、Y. Yoshinaga氏採集)が発見され、精査の結果、牧野先生のカエデダイヤモンドソウは、若林・里見両氏のエチゼンダイヤモンドソウと同一物であることが判明した。(若林三千男：植物分類・

地理第27巻121—122頁、1976年)、そうすると、牧野先生以来、長らくダイモンジソウの変種として使われてきた「カエデダイモンジソウ」の和名をもつ植物は、ダイモンジソウとは別種の、若林・里見両氏のエチゼンダイモンジソウとなる。

牧野富太郎博士の記載文は、葉の形状についてのみ記され、*Leaves reniform-orbicular in outline, …… 3-nerved, the middle lobe larger*、と3行にわたっているが、花、地下茎については全く記されていない。(この時までには記載文はラテン文でなくても良かったので有効)、それで葉の形状だけで、後の人が(中井氏、原氏、大井氏、北村氏など)牧野先生のカエデダイモンジソウとは異なる植物を「カエデダイモンジソウ」と判断していたことになる。悪いことに基準標本が、榎山・小林両氏によって発見されるまでは行方不明であったので、誰もこれに気付かなかったということである。

そうすると、従来誤って用いられて来た「カエデダイモンジソウ」という和名と *S. fortunei* V. *partita* という学名は使えない。中井猛之進博士が1949年10月17日山口県阿武郡滑山^{ナガラ}で採取した標本に基づいて、ナメラダイモンジソウ *S. fortunei* var. *suwoensis* Nakai が従来誤用されていた「カエデダイモンジソウ」の型に属するものなので、従来のカエデダイモンジソウはナメラダイモンジソウと呼びかえることになる。(中井博士：科学博物館紀要33号9頁、1953年。ナメラダイモンジソウの記載発表)

e. ダイモンジソウ (*S. fortunei* var. *incislobata* Nakai)

日本全土に産し、巾広い変異がある。北海道産の、葉が無毛で基部截形、花序2~3花のものにエゾダイモンジソウ (form. *yesoensis* Hara) の名があるが、本州にも同様のものがあるという。東北から北海道の海岸附近に見られる、葉が厚く、毛の少ないものにはハマダイモンジソウ (form. *maritima* Hara) の名がある。花卉帯紅色、茎葉に毛をもつものにはアカバナダイモンジソウ (form. *rubra* Hara) の名がある。

高山に見られる諸形についても多くの区別があり、花卉に僅か鋸歯のあるものはキレベン(ノコベン)ダイモンジソウ (form. *serrolata* Nakai)、花卉に僅か鋸歯があって帯紅色のものはアカベンダイモンジソウ (form. *rosea* Hara) と称される。白山産の、葉柄・葉身に毛を密布するものにはケダイモンジソウ (form. *pilosa* Hara) と呼ばれ、葉裏面が紅紫色のものはウラベニダイモンジソウ (form. *rubrifolia* Honda) と称される。また、高山では、花卉が6枚以上で長さが殆んど等しく、トレードマークの「大文字」にならないものが見受けられ、「キクザキダイモンジソウ」の名が用いられることもある。高山のものについては、1908年、白馬岳産の標本にもとずいてミヤマダイモンジソウ (*S. cortusaefolia* var. *alpina* Matsumura et Nakai, 1938年、*S. fortunei* var. *alpina* Nakai に変更) が発表され、*S. fortunei* の変種名としては最も古い。北海道の高山では葉が厚く、裂片の極めて浅いものがあり、中井猛之進博士のアツバダイモンジソウ (var. *breviloba* Nakai) に相当する様だが、

区別する必要があるかどうかは疑問である。

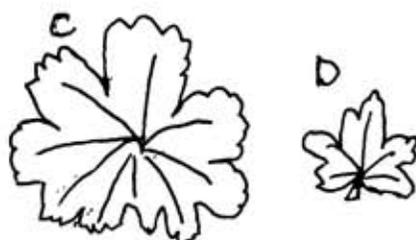
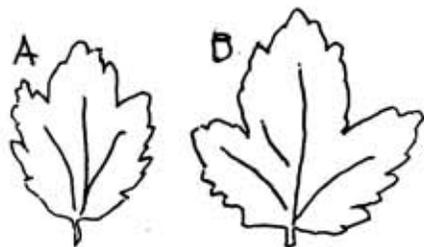
これらの他にも、更にいくつかの変種、品種が記載されているが、それぞれの区分为明瞭な一つの体系をなさないもので、例えば、ある個体について、葉の特徴ではA変種に、花の色ではB品種に、花卉の形ではC品種に該当するという様な場合が多く、すっきりしないことがよくある。

ユキノシタ亜属の他の種については、仏人Urban Faurie氏採集の利尻岳頂上産の標本の中にジンジソウがあるともいわれているが、明らかでない。

B. ムカゴユキノシタ亜属 (subgen. Nephrophyllum)

我国では、本州中部高山にムカゴユキノシタを、北海道にキヨシソウを産する。

(2) キヨシソウ (*Saxifragabracteata* D. Don) は、根室落石附近の湿地に産する。概形ネコノメソウ類に似て、「ネコノメザクラ」の異名もあるが、ネコノメソウ属のものは花卉を欠き雄蕊が8又は4(稀に10)であるに対し、5枚の、白色で長さ5mm位の花弁を有し、雄蕊10なので容易に区別できる。国外では、千島、樺太、カムチャッカ、アリューシャン、アラスカ沿岸部に産する。



ウチワダイヤモンドソウ (A, B) とナメラダイヤモンドソウ (C, D) の葉形。× $\frac{2}{3}$ 原寛 (1939年) より改写

(2)

C. シコタンソウ亜属 (subgen. *Ciliaria*) 世界に次の2節約10種を含む。

- 花茎は無葉又は小形の1茎葉を有し、花卉基部は約2mmの爪となる。
 - 1. くもまぐさ節
 - 花茎下半に数枚の茎葉あり。花卉基部は爪部をなさないか、1mm弱の爪部となる。
 - 2. しこたんそう節

1. くもまぐさ節 (Sect. *Merkianae*) ひめちしまくもまぐさ (*Saxifraga merkii*) 1種で構成される節である。

(3) ヒメチシマクモマグサ (シベリアクモマグサ) *Saxifraga merkii* Fischer ソ連邦ヤプロノイ山脈よりカムチャッカに至る分布域を有し、千島列島より北海道中央高地を経て本州中部高山 (var. *idsuroei*, クモマグサ) に至る。東部シベリア、カムチャッカ、北千島産の母種 (var. *merkii*) は、花時の高さ4cm前後、花茎は分枝せず、1~3花を着け、葉は全縁(極めて稀に先端小三歯)で、同型のものが中央高地各所に産し、武田久吉博士により「ヒメチシマクモマグサ」

の和名を与えられた。中央高地各所には、花時の高さ15cmにも及び、花茎はしばしば分枝、3~8花を着け、葉は長さ2cm、巾1cm、先端3裂するものがあり、武田久吉博士により変種と認められ、var. *robusta* Takeda (チシマクモマグサ。館脇操博士は、オオチシマクモマグサと呼んだ) の名を与えられた。しかし、中央高地産のものについてこれらの2型を明確に区別できない場合もある。

一方、本州中部高山(御岳、槍ヶ岳、穂高岳、白馬岳等)に産するものは、花時の高さ10cm前後、花茎は時に分枝、1~4花を着け、葉は長さ2cm程度、巾5mm前後、先端3裂するもので、var. *idsuroei* (Franch. et Savat.) Engler (天保6年本草会物品目録にクモマグサの和名が登載されているという) とされる。即ち、北海道では、中央高地にヒメチシマクモマグサとチシマクモマグサの2型を産することになる。

2. しこたんそう節 (Sect. *Tachyphyllum*)

世界に約9種あり、3種が北海道に産する。

- | | | |
|---|---|---|
| 1 | { | 葉は全縁。……………シコタンソウ |
| | | 葉の先端は3裂又は3歯。……………2 |
| 2 | { | 葉の縁辺は小刺毛あり、葉先端浅く3裂又は3歯。花卉基部は0.5~1mmの爪となる。……………ユウバリクモマグサ |
| | | 葉の縁辺は小腺毛あり、先端明瞭に3裂。花卉基部爪なし。……………エゾノクモマグサ |

(4) シコタンソウ (*Saxifraga chertlerioides* D. Don var. *rebunshirensis* (Engl. et Irmsh.) Hara) リンネ (1753年) によってシベリアを基準産地として記載された *S. bronchialis* に極

めて近い種であり、これと同一視する学者もある。*S. chertlerioides* (チャボシコタンソウ) は、1822年、カムチャッカ産の標品に基づいて英国園芸家 David Don により記載命名された。我国本州中部及び北海道の高山産のものに、この基準型に該当するものの産が報告されているが、一般に、我国産のものは、基準型に比して稍々大形で地上茎が伸び、葉が長く巾狭く、花卉は黄点の他に上半部に紅点を有するという差があり、礼文島産のものに与えられた品種名を広義にとって、変種として扱われている。カムチャッカ産の、全体著しく小形で茎葉先端内曲して密集し、花卉は爪部が殆んどないものに *S. pseudo-burseriana* Fischer (1831年) の名が与えられたが、これはその後、チャボシコタンソウの変種 (Fr. Schmidt 1868年)、或いは品種 (Engler 及び Irmshcher, 1919年)、或いは単なる変異として扱われている。館脇操博士は、利尻岳産のものについてこの型と認め、ヒメクモマグサの和名を用いられた (札幌農林学会報 121号、1934年)。

我国のシコタンソウを、*S. bronchialis* に含めて扱うなら、Hultén 博士 (1968年) の *S. bronchialis* L. subsp. *chertlerioides* (D. Don) Hultén という見解が妥当と思われ、更にその変種 var. *rebunshirensis* として扱うべきであろう。

南アルプス北岳産の、茎が長く横走し葉がまばらに着くものにハイシコタンソウ (form. *laxa* Hara) の名があり、道内の高山でも、特にデブリの間に生育するものについて、これに該当すると思われるものがある。

長野県戸隠山産の、葉が細く、先端の刺が

著しく、モマグサの名がとされ、富良野

(5) yupar

花卉は極め

い爪と

Hultén

の *S. b*

に一致

種と認

植物体

(6)

nishi

葉の

する。

した標

記載発

れてお

D. chertlerioides

地上

著しく、又、縁辺の毛が目立つものにヒメクモマグサ (var. *togakushensis* Hara) の名があり、層雲峡産のものもこの形であるとされた。後に道内各地で類似のものが報告されており、中央高地では、忠別岳、平山、富良野岳から知られている。

(5) ユウパリクモマグサ (*Saxifraga yuparensis* Nosaka)

花卉は殆んど黄点のみで、紅点をもつものは極めて稀であり、基部は 0.5 ~ 1 mm の短い爪となる。この様な花卉に関する特徴は、Hultén 博士 (1929年カムチャッカ植物誌) の *S. bronchialis* L. subsp. *funstonii* に一致するが、葉は概して先端浅く3裂 (時には3歯) する点が異なる。筆者はこれを独立種と認め、上記の学名を与えた。夕張岳産で、植物体全体は鮮明な黄緑色である。

(6) エゾノクモマグサ (*Saxifraga nishidae* Miyabe et Kudo)

葉の先端は明瞭に3裂、縁辺は腺毛を散生する。西田彰三氏が1916年夕張岳に於て採集した標品に基づき、宮部・工藤両先生により記載発表された。夕張岳に於ても産地は限られており、稀品である。

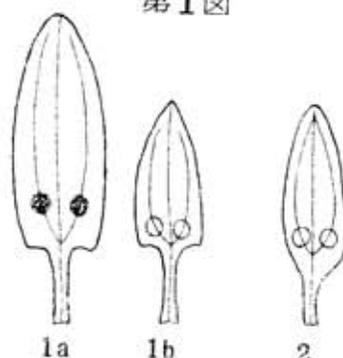
(3)

D. チシマイワブキ亜属 (Subgen. *Micranthes*)

地上茎は発達悪く、分枝しない。Engler 氏の *Boraphila* 節の大部分を含み、世界でおよそ 100 種が記載されている。

我国には、原寛博士 (1939年) によると、3節5種があり、すべて北海道に産する。

第1図



1a, 1b: クモマユキノシタ
の花弁 (×6)

1a: 原寛(1939)による

1b: 武田久吉(1915)による

2: *Saxifraga stellaris*
の花弁 Hutchinson(1955)
による

(何れも改写)



第2図 クモマユキノシタ
の分布
(野坂(1974)による)

- 1 { 根出葉の葉柄は不明瞭……………
- …………… a. クモユキノシタ節
- 1 { 根出葉の葉柄は明瞭…………… 2
- 2 { 葉柄は細長く、葉身は卵円形～腎円形
- …………… b. チシマイワブキ節
- 2 { 葉柄は幅広く、葉身基部につながる。葉
- 身は卵形～長楕円形……………
- …………… c. ヤマハナソウ節

a. クモユキノシタ節 (Sect. Arabisa)

広く周極分布する *Saxifraga stellaris* L. を基準種として、世界で10種以上があるが、我国にはクモユキノシタ1種のみを産する。

(7) クモユキノシタ (*Saxifraga laciniata* Nakai et Takeda。ヒメヤマハナソウ)

北朝鮮長白山脈の採集調査を行った James により採集され、1880年、*S. stellaris* として記録された。この標本に基づき、Komarov は、満州植物誌 (1904年) に、*S. stellaris* var. *comosa* の学名を用いた。これがクモユキノシタの最初の記録である。

S. stellaris は、花卉基部が急に細まって柄につづき、葯は白～淡紫色、時に紫色であるのに対して、クモユキノシタは、花卉基部が心脚・耳状に突出して柄につながり、葯は暗赤色である点異なる。なお、クモユキノシタの葉の鋸歯は、深く大きく、欠刻様である。第1図は、これら2種の花弁を示す。

中井猛之進博士は、ソウルの学校教員であった森氏が白頭山で採集した標本 (1913年) により、一方、武田久吉博士は、柳沢秀雄氏

が夕張岳で採集した標本と小泉秀雄氏が大雪山で採集した標本 (ともに1913年) により、ともに *S. stellaris* とは別種であることを認め、James の標本もクモユキノシタであることを確認し、両博士連名で、中井博士は植物学雑誌第28巻 (1914年) に、武田博士はエジンバラの王立植物園紀要第39号 (1915年) に、それぞれ記載発表した。

比較的湿潤な裸地に産し、夕張岳では、蛇紋岩砂礫地または蛇紋岩崩土地にみられ、大雪山では小泉岳、高根が原等に見られる。世界における分布は第2図のとおりである。

地上茎は3cm以上にも及び、細い地下茎を引き、葉も多少伸びた形のものをつルクモマグサ (つルクモマユキノシタ。 *S. laciniata* N. et T. var. *takedana* (Nakai) Hara) と称し、大雪山及び北朝鮮白頭山の産である。この変種は、はじめ前記森氏採集の標本に基づき、中井博士により独立種として記載され、*S. takedana* Nakai の学名を与えられてクモユキノシタと同時に1914年発表されたものである。地上茎が多少伸びた形は、大雪山でも夕張岳でも見られ、細い地下茎を生じる他は、クモユキノシタと同形のものが白頭山で知られることから、この変種はそれほど判然としたものではないのかも知れない。

b. チシマイワブキ節 (Sect. Hydaticea)
ウラル山脈・モンゴル北部からシベリアを経てカムチャッカに至る分布域を有するチョウセンイワブキ (シベリアイワブキ。 *S. punctata* L. 種の範囲を広くとると、アラスカまで分布する) を基準種として、アジアと北米に約10種がある。

大雪
より、
ること
ノシタ
中井博
武田博
号 (19

は、蛇
れ、大
る。世
る。

下茎を
クモマ

inia
kai)

頭山の
氏採集

種とし
の学名

に1914

少伸び
、細い

タと同
、この

いのか

atica)

リアを
るチョ

S. P
アラ
アジア

- 子房下半は隆起した花盤に埋まる。花糸は花弁の½長、花弁は紫褐～淡緑色。
- 1 {(8)エゾクロクモソウ
- 子房は基部のみ花盤に埋まる。花糸は花弁とほぼ同長、花弁は白色。.....2
- 葉身は腎円形、花茎は高さ5~25cm、茎葉なし。種子は両端に短突起あり。.....
- 2 {(9)チシマイワブキ
- 葉身は卵心形、花茎は高さ15cmから60cm以上に及び、時に1枚の茎葉あり。種子両端に種子本体とほぼ同長の突起あり。
-(10)フキユキノシタ

(8) エゾクロクモソウ (*Saxifraga fusca Maximowicz*)

低地より高山帯下部にかけて、日かげの沢沿いなどの適湿半陰地に、全道いたるところに見られ、東北地方にも分布する。1872年、Maximowiczによって、Sieboldの標本に記された「キクブキ」の和名を付して記載発表されたが、そのとき引用された飯沼慾斎の草木図説の図と、シーボルトの標本とが本州産のクロクモソウ(キクブキ)に該当し、マキシモウイチ自身北海道で採集した標本と、記載文のほとんどの部分がエゾクロクモソウに該当する。1876年、FranchetとSavatierが、エゾクロクモソウをクロクモソウの変種として区別し、*S. fusca* Max. var. *divaricata* Franch. et Savat. の学名を与えた。

マキシモウイチの原記載がエゾクロクモソウを指していることから、*S. fusca*の基準型はエゾクロクモソウであって、本州の型をその変種として扱うのが正しいとされる。

本州・四国・九州の高山に産するクロクモ

ソウ (*S. fusca* Max. var. *kikubuki Ohwi*) とは、次のように区別される。

- ・花茎下半は長軟毛を、上半は細毛をやや密布し、花梗は2~5mm長、円錐花序はやや密花、花弁はおおむね紫褐色。.....
-クロクモソウ(キクブキ)
- ・花茎に小腺毛をまばらにつけ、花梗は10mm前後、円錐花序はやや疎花、花弁は淡緑~僅かに暗紫色、稀に暗紅紫色。.....
-エゾクロクモソウ

葉の鋸歯の状態をはじめとして極めて変異多く、鋸歯が卵形・微凸頭のをクロクモソウ、三角形で多数のものをエゾクロクモソウとする人もあるが、ほとんど区別の根拠とはならない。道央亜高山帯では花弁が暗紫色~暗紅紫色のものが多く、淡緑色のものは少いので、花弁の色によってのみ区分することは間違いを生じやすい。ダイヤモンドソウの場合と同様に、細分するとむしろ混乱を招く。

館脇操博士は、花序の疎密に重点をおいて区別されたが、その場合、クロクモソウとエゾクロクモソウの両型とも北海道に産するとされている。

シベリアのチョウセンイワブキ(シベリアイワブキ、*S. punctata* L.)に比し、花が小さく、花弁が暗色、花糸が短い等の差異により別種とされている。

北海道産のものでは、次の変種と品種が知られている。

・チシマクロクモソウ (*S. fusca* Max. var. *kurilensis Ohwi*)

花茎・花梗が無毛のもので、斜里岳に知られ、千島列島からカムチャッカに分布する。

Komarov (1929年) がカムチャッカ産のものに基づいて記載した *S. purpurascens* Komarov と同一物である。

・ウスゲクロクモソウ (*S. fusca* Max. form. *intermedia* Hara)

花茎にクロクモソウと同様の細毛を混じえるもので、日高山脈、北見から記録されている。

(9) チシマイワブキ (*Saxifraga reniformis* Ohwi)

チョウセンイワブキ (*S. punctata* L.) に近く、その垂種 (時には別種) とされているアラスカの *S. punctata* subsp. *nelsoniana* (D. Don) Hultén (= *S. nelsoniana* D. Don) や、カムチャッカ南部及びアリューシャンの *S. punctata* subsp. *insularis* Hultén に極めて近い。学者によっては、本種を *S. punctata* L. に含めて取り扱う人もある。

シベリアの *S. punctata* に対して、葉の毛が少く、花序は密花、花梗には腺毛がなく軟毛のみである。アラスカの *S. nelsoniana* に比して花が小さく、アリューシャンのものに比して果実が小さい。

しかし、北千島産のチシマイワブキは、北海道産のものより花や果実の大形のものが多く、*S. punctata* 群のものとの差異は少くなる。

大雪山、利尻島等に知られ、樺太、千島に分布する。

(10) フキユキノシタ (*Saxifraga japonica* Boissieu)

北海道、本州、四国 (鰐山) の山間溪側に産する日本固有種である。

本道では、斜里岳、大雪山、夕張岳、日高山脈等より知られている。夕張岳では、低地の針広混交林帯よりダケカンバ帯下部にかけて溪畔陰地に生じ、さして珍しくない。

我国産ユキノシタ属植物中で最も大型のものである。

c. ヤマハナソウ節 (Sect. *Dermasea*)
周極分布をする *S. nivalis* L. を基準種として世界に20種以上が知られる節であるが、我国ではヤマハナソウ1種のみを産する。

(11) ヤマハナソウ (*Saxifraga sachalinensis* Fr. Schmidt)

樺太産の標本に基づき、Schmidt によって1868年、樺太植物誌に新種として記載された。

アラスカの *S. reflexa* Hooker に近い種である。樺太、南千島、北海道に分布し、しばしば「水湿に富む岩上に産する」と記されるが、時にはイワハダザオ類などと混在して、かなり乾燥気味の岩上にも見られる。低地より高山帯まで広く生じる。

北海道産のものは樺太産のものに比して葉が薄く鋸歯が不斉であるとして、小樽産及び定山溪産の標本により Franchet が *S. virginensis* Michaux var. *yesoensis* Franchet を記載し、後に Engler が独立種として *S. yesoensis* (Franchet) Engler としたが、単なる個体変異である。また、大型のものに *S. sachalinensis* var. *amplissima* の名が Engler と Irmscher によって与えられたが、これも単に、特に大型なものに過ぎず、何れも区別する必要はない。

(有朋高校 理学博士)



少
私は
岩山あ
から石
を持つ
でも、
なって
ある。
街を
この先
くへや
もあっ
を持っ
スモッ
なチャ
な小さ
まって
日
だが
むよう
と続く